



ひまわり通信

No.00743. 2025.11.13(木)

健康寿命から貢献寿命へ

はかり知れない多剤併用の危険性！！疑問視される主作用の治療効果！！

●恐ろしい副作用の相加・相乗効果

薬の飲み合わせは複合剤だけでなく、医師による多剤併用も同じです。一つの病気に対して数種類、ひどいときには10種類以上もの薬が処方されます。多剤併用は、いまや医療の常識とっていいのですが、その危険性は、はかり知れないものがあります。

多剤併用、複合剤の目的は、それぞれの薬の主作用を強めること、あるいはいくつかの薬を寄せ集めて治療効果をあげることです。しかし、ここで問題になるのは、目的とする主作用が、はたして強まっているか、疑わしい場合が少なくないことです。混ぜることによって、一方の薬剤の主作用が、他の薬剤によっておさえられる組み合わせも考えられます。

さらに、それにも増して問題となるのは、主作用が加算増強される上に、副作用が加算されることです。すなわち副作用の相加・相乗作用が起こってくることです。相加作用とは、ある薬の副作用が一つで、別の薬の副作用が一つの場合、併用によって一プラスで二倍になることをいいます。そして、もっと怖いのは一プラスが、三にも五にもなる相乗作用です。主作用だけに相加・相乗作用があり、副作用にはそれがないということはありえません。

こうして、飲み合わせる薬の数が多ければ多いほど、副作用発生の頻度は高くなり、しかもその被害は大きくなります。風邪をひいて胃が悪くなった、腎臓病や肝臓病になったという場合、実は風邪に対していくつもの薬を飲み合わせたことが原因である例が少なくありません。

●胃を障害する薬の飲み合わせ

抗生物質、抗炎症剤、解熱鎮痛剤の三者はしばしば併用されます。抗生物質は化膿症の予防と治療に、現在最も多く使われている薬剤です。また、ほとんどの病気は炎症をとまいますから、抗炎症剤も高い頻度で使われます。さらに、多くの病気は痛み・発熱をとまいますから、鎮痛剤は当然のように使われます。

これらの薬剤には、胃を障害する危険性の高いものと、比較的危険の少ないものとがあります。胃にまったく無害である薬はありません。危険性の高い例をあげましょう。

もともと胃の弱い人が、何かの感染症を起こしたとします。そのとき、抗生物質アンピシリン、抗炎症剤ブタゾリン、鎮痛剤アスピリンを一度に与えたら、感染症のほうは少しはよくなったとしても、胃の症状はおそらくたちどころに悪化します。感染症に胃潰瘍併発、それに体力消耗が加われば、危険な状態におちいることは避けられないでしょう。

これに対し、比較的危険でない薬を組み合わせても、それは胃にとって無害であることはありえませんし、それがほかの臓器にとっても安全ということはありません。何故なら肝臓を障害する薬としない薬の区別は、胃を考える場合とは異なってくるからです。肝臓によい組み合わせは。胃によい組み合わせとは別の薬なのです。さらに、腎臓はどうか、骨髄はどうか・・・というふうに考えていくと、結局、まったく安全な組み合わせというものは、きわめて少ないという結論になります。

「新・くすりのわかる本」より抜粋

イスラエルの赤い宝石「ドナリエラ」愛の一粒運動実施中！！

(株)日健総本社 兵庫特約店

(有)クロスタニンひまわり

☎ 0120-42-8198